

ワカサギ、シラウオの調査

(宍道湖・中海水産資源維持再生事業)

松本洋典

1. 研究目的

宍道湖・中海におけるワカサギ、シラウオの資源・生態と、それを対象とする漁業の実態を明らかにし、これら資源の維持・増大を図る。

2. 研究方法

(1) ワカサギ・シラウオ産卵状況調査

平成 25 年 2 月に斐伊川河口から約 2km 上流の灘橋までの間に設けた定点 (18 箇所：通常 24 箇所であるが、昨年と同様に本年度も調査時の斐伊川の水量低下のため船を使用できず、やむなく陸上から河川に入りサンプル採集を行ったところ、深みや流速の極端に早い定点 6 箇所での実施を断念せざるを得なかった) において、エクマンバージ採泥器 (0.02 m²) による採泥を実施してワカサギ卵を採集した。試料は 10% ホルマリン固定・ローズベンガル染色を行ったのち計数した。また、シラウオ卵についても宍道湖沿岸域一円の 11 箇所において同様の調査を、1 月から 3 月まで月 1 回実施した。

(2) 稚魚分布調査

平成 24 年 6 月 20 日に宍道湖および新建川・船川の計 5 箇所で調査船わかさぎ丸を用い、桁引網 (目合 2 mm、全長 26m、桁長 4.5m) により各箇所 30m 曳網した。

3. 研究結果

(1) 産卵の状況 (巻末の資料参照)

採泥箇所数 18 箇所のうちワカサギ卵が確認された地点はなく危機的な状況にある。

またシラウオ産卵数については、9 定点の 3 月調査時における平均産卵密度は 1 m²あたり 2,218 粒と、過去最高だった昨年 (2,156 粒) をわずかに上回った。

(2) 稚魚の分布状況 (巻末の資料参照)

今年度の 1 曳網当りワカサギ稚魚平均入網尾

数は 5.15 尾と非常に高い水準で (14 ~ 17 年度 144 ~ 279 尾)、昨年の 0.51 尾よりも大きく増加した。これは前年度の産卵状況が前々年度と比較して好転したことに起因すると判断できる (8.3 粒/m² → 202.0 粒/m²)。一方、シラウオは 29,092 尾 (同 933 ~ 2,183 尾) と、これも非常に高い水準であった。

(3) ワカサギの溜池移植放流

ワカサギ放流事業をより効果的に実施するため、宍道湖漁協ではため池を利用した孵化放流用親魚を確保する活動を、平成 19 年度から実施している (ワカサギバンク事業)。しかし平成 20 年夏の渇水は、通常ワカサギの好適な生息環境を維持しているこのため池にも大きなダメージを与えたため、平成 21 年以降は、池干し取り揚げの中止および発眼卵放流など、ため池におけるワカサギ生息の回復を継続的に図っている。またワカサギ生息が可能と思われる別のため池についても、平成 23 年 6 月 12 日に稚魚 150 尾を放流して、親魚の涵養を図っている。

(4) 今年度の漁獲

今年度の定置網漁獲記録 (宍道湖漁協集計) では、ワカサギの漁獲は 0 であった。宍道湖漁協による採卵用親魚採捕は 11 尾を漁獲したものの、前年の 702 尾を大きく下回り、産卵場調査および稚魚分布調査からの予測を裏切る結果となった。これは、今年度の夏季が猛暑渇水に見舞われたことに起因する可能性が高い。

4. 研究成果

- 得られた結果は、宍道湖漁協のます網組合の役員会および総会、また宍道湖・中海水産資源維持再生事業検討会でも発表した。
- 平成 19 年度漁期から実施された、1 ヶ月間 (1/15 ~ 2/15) の刺し網の宍道湖全域禁漁は平成 25 年度以降、当面の間継続される。